

[立教大学]

後世に繋げたい本学の象徴

安部 紀芳 立教学院本部総務部施設課担当課長

1 本館時計の経緯

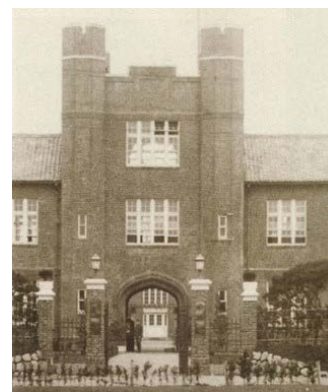
立教大学のシンボルとも言える本館（1号館／モリス館）の中央上部に鎮座する時計は、実はいつ設置されたか不明である。1918（大正7）年完成当時の写真にはその姿はなく、その数年後、1923（大正12）年関東大震災被災後の写真にはその姿が見られるため、建物完成後に外壁当該部に穴をあけ時計が設置されたと思われる。本館は関東大震災被災後の1925（大正14）年に中央部を3階建てから2階建てへの減築という、その姿を大きく変える改修がなされた。この改修に合わせ、時計は1度取り外され、改めて設置され現在の姿となっている。

2 本館時計の仕組み

本館中央南北面に見えている文字盤は時計本体ではなく、文字盤裏側の屋根裏（2階上部）北西に位置する1台の時計本体が文字盤の指針を動かしている。時計本体裏側から東に向かって1本の軸が伸び、中央北側に設置された分配器により南北方向へ2本の軸に分岐され、文字盤の裏側から表の指針に直接、接続され動く仕組みである。時計本体はイギリス、E・デント社製の機械式時計であり、動力には分銅（重り）が用いられている。この分銅は本館に4本ある塔のうち北西の塔内に、屋根裏北西に位置する



南側文字盤裏へ伸びる時計軸



上：完成当時
下：関東大震災被災後

時計本体から2階床までの間に架かっており、3、4日の間隔で手動で巻き上げている。先のとおり、この時計は3階上部に設置されていたが、関東大震災後の修復により設置場所が低くなり、合わせてこの塔内の高さ（長さ）もおおよそ半分になり、一週間巻きだったものが現在の間隔となった。

南側文字盤への軸の長さは約10mと長く、そのため、指針が6時から12時へ動く方向（上り方向と呼ぶ）では軸先端に設置された指針（分針は長さ455mm、太さ28mm、時針は長さ280mm、太さ35mm）の重さからスムーズな回転が出来ず軸にねじれが生じ、北側文字盤の指針と比べ遅れがちである。時折、南北の指針がずれると同じ時を刻まない場合があり、その際は振り子を止め一時的に時計を止め、南北指針及び現時刻との調整後、改めて時計の振り子を動かす、という何ともレトロな方法で修正する。なお12時から6時へ動く方向（同様に下り方向と呼ぶ）では遅れはない。

分銅は3、4日の間隔を主に月曜日と金曜日に固定して巻き上げている。これは年末年始などの長期休業期間も同様である。ものの数分で終わる作業だが、時計の動

きを維持する欠かせない作業である。

時計本体には鐘を鳴らすための時計も併設されている。鐘は分銅がかかっている塔の屋上、時計本体の直上に設置され、鐘を鳴らすための時計と鐘を叩くハンマーとがワイヤーで結ばれていたようであり、時計の動きに連動してハンマーが鐘を叩き鳴らしていたようである。なお現在、ワイヤーは撤去され、この鐘は鳴らしていない。

3 史料価値の高い貴重な時計

時計本体の内部機構が記された図面のような物が無いため、過去に時計本体のオーバーホールと図面化の相談を行ったことがあるが、約1年以上かかると提示され断念したことがある。最近、時計本体などについて改めて時計の専門家にご確認いただいたが、劣化などは見られず比較的問題なく動いていると教えられた。

この型式と同じ時計は東京では本学に残るのみで大変貴重であると考えている。また本学に関係する全員の方々の記憶に残っている時計でもあり、大切にしなければならぬとも考えている。今後も長きにわたり使い続けられるよう、大切に維持していきたい。

[大阪学院大学]

時を刻む学びのシンボル

—大阪学院大学が刻む実践的な人材の育成—

宮原 秀明 大阪学院大学事務長

大阪学院大学の歴史は、1940年に初代総長・白井種雄によって創設された「関西簿記研究所」に端を発する。戦時下でも、実践的な学びを求めて研鑽を続けたこの研究所は、やがて「関西経理専門学校」へと歩みを進め、1959年には高等学校を開校した。1962年には、短期大学（現在の大阪学院大学短期大学部の前身）を開学し、1963年には「大阪学院大学」を創立するに至る。こうして、多様な学部・学科および大学院を擁する総合大学へと発展してきた背景には、「教育と学術の研究を通じ、広く一般社会に貢献し、且つ人類の福祉と平和に寄与する視野の広い実践的な人材の育成を目的とする」と

いう建学の精神が、開学以来一貫して揺るぎなく貫かれてきた歴史がある。

本学が大切にしているのは、実学教育を基盤としながらも、国際社会や高度情報化が急速に進む時代の要請に因應するための柔軟なカリキュラムと教育環境の整備である。創設期から、公認会計士や税理士など、実務の第一線で活躍する人材を数多く輩出してきた実績は、経営・法律・語学・情報といった多彩な分野の学びへと広がり、今なお当初の理念を継承しつつ、社会の多様なニーズに対応できる総合的な教育体制を築き上げている。実際、本学の学びの場では、学生が自らの関心を深めながら専門知識を磨き、社会とのつながりを見据えて成長できるよう、様々なプログラムやサポートが用意されている。

その象徴が、キャンパスの中心にそびえる時計塔である。初代総長の時代に大学のシンボルとして構想・設置された「時計台」は、拡充整備の中で再建された現行の時計塔とは別の建造物だが、いずれも学生や教職員が日々の時を確認するうえで欠かせない存在である。同時に、学びへの姿勢を体現するモニュメントであった。実

際、本学ではチャイムや壁掛け時計がないため、学生たちは時計塔を見上げて時間を意識しながら、学業や研究に打ち込んできた。また、本学の広報誌は「L'horloge」（フランス語で「大時計」）と名付けられており、この時計塔が放つ象徴性を強く物語っている。

かつて、ある教員がキャンパスの門をくぐるたびに時計台を見上げ、自身の腕時計と時刻を合わせていた姿を、周囲の人々が「時計台に向かって礼をしている」と受け取ったという逸話がある。実際は授業に遅れないよう確認する行動であったが、それを「礼を尽くす」という美德の姿として評価したのは、本学特有の「自主性を重んじる気風」が根付いていたからかもしれない。1970年代から80年代、国際化や情報化に対応するため、キャンパス拡充整備年次計画が推し進められるなかでも、この時計塔は変わらぬランドマークとして存在感を放ち、学生や教職員の帰属意識を支え続けてきた。

現在、本学は、商学部、経営学部（経営学科・ホスピタリティ経営学科）、経済学部、法学部、外国語学部、国際学部、情報学部の7学部8学科、大学院、短

期大学部に加え、法人内にAST College（関西経理専門学校、関西医科専門学校）および高等学校を擁する一大総合学園として、更なる発展を続けている。豊かな教育環境のもと、学生たちは自らの夢を育みながら、社会に羽ばたくための力を着実に養っている。その歴史と理念を、物理的かつ象徴的に示してきたのが時計塔であり、時代の変遷を経ても「大学の時を刻む」この姿は、数多の人々の心に深く刻まれてきた。かつて大学生活を送った卒業生が懐かしみ、見上げた当時の記憶を鮮明に思い起こすのは、そこに築かれた

学びの姿勢や仲間との絆が、確かな形で根付いている証と言えるだろう。こうして、時計塔というランドマークは、本学の歩みと希望を映し出すシンボルとして、今なおキャンパスを見守り続けているのだ。



校舎から時計塔を望む

[愛知大学]

学生たちの願いが生んだ時を刻む塔 —愛知大学に響く「自由・受難の鐘」とその由来—

藤田 佳久 愛知大学名誉教授・同東亜同文書院大学記念センター元センター長

1 愛知大学の誕生

愛知県豊橋市の市街地に南接する丘の上に旧制「愛知大学」が豊橋予備士官学校の施設跡地に認可開設されたのは、終戦直後の1946年11月15日のことであった。

しかし、それは全くの新設ではなく、終戦まで大陸上海にあった旧制「東亜同文書院大学」をルーツ校とし、文部省（当時）の誘導もあって、大陸各地や日本の植民地で終戦により学校を失った旧帝大や大学、高専校などの学生たちも受け入れ、「愛知大学」（以下、愛大）として開学した。入学者は書院生が最も多かったが、出身校は80余校に及び、まさに「引揚げ総合大学」、「ア

ジア文化大学」の様相を示した。そのため入学生は編入生が多く、予科3年、学部3年、計6学年分の授業を一斉に開講した。さらに空襲で焼け野が原になった東海地方の各都市で、学ぶ機会を失っていた市民、勤労者のために全教員が各都市に向き「土曜講座」を開講。受講生がすぐに1万人を超え、「修了証書」の発行依頼が大学へ殺到したことから、大学は正規の夜間部を豊橋、名古屋両キャンパスに増設した。こうして愛知大学は、昼はトップレベルの旧制大学生から、夜は市民、勤労学生まで、幅広く、多種多様な多くの学生を相手に授業を展開した。そこに愛知大学の誕生の原点、そして特徴があった。

2 「自由・受難の鐘」の登場

そしてこの多くの授業の終始時刻を伝えたのが、物資不足の折柄、おろから本部事務棟に隣接し、各教室等に近い松の木に吊り下げられていた鐘であった。用務員さんが毎授業時間ごとにその鐘を打ち鳴らす。その音色は全学生、教職員の胸に刻み込まれていた。

そんな折、第4回卒業生たちがその鐘の姿に寂しさを覚え、愛大の時計台にすべく2本の柱と屋根を寄贈し、その柱に

「自由・受難」の文字を刻んだ。それは当時学監であった小岩井淨先生の「観取命運自在」の書からのヒントであった。その意味は、この寄贈代表の藤田稔氏によれば、「自由を求めれば、苦難は必然避けられないものだ」ということで、改めて「愛大の原点に立ち返り、真の鐘を鳴らしてゆきたい」という卒業生たちの願いと学園の志があった。

3 愛大にとっての「自由・受難」史

当時の愛大には書院生たちの雰囲気もあった。彼らは上海の書院生時代、日中友好と連携への強い志を持っていたが、1943年、政府の学徒出陣や勤労に動員され、その志への理不尽さを抱え、戦場へ赴かざるを得なかった。本間喜一学長・院長は内地の学長とは違い、「生きて帰ってこい」と書院生を送り出した。学長も書院生も「自由」への距離と自由の価値を噛みしめたに違いなかった。

また、戦後の1949年の大学学制改革で新制大学が各地に誕生するが、地元名古屋大学は文科系学部新設に当たり、人材不足から愛大の人材を求め、愛大との合併案を提案してきたことがあった。それに対して、愛大では教員と学生が数回にわたる集会での議論の結果、その提案を断っている。そ

の大きな理由は、戦時下で行った政府による大学への干渉への懸念であり、「私学」の「自由」の価値を選択したのであった。

そして、この「自由・受難の鐘」の塔ができた翌1952年、深夜の構内に不法侵入してきた不審者2人組がいた。これに気づいた寮生が取り押さえたら、警察官であったということ、逆に彼が、そして寮生の一部までもが逮捕されるという理不尽な事件が発生した。「愛大事件」である。詳細は省くが、折しも最高裁事務総長から愛知大学学長に復帰した本間喜一は、あくまでも学生の立場を信じ、擁護したことで、学生たちから絶大な信頼を得、それにより、新生愛大は一つにまとまった。まさに「自由・受難」の精神は、全愛大学園関係者に強く響いたに違いなかった。今でも「自由・受難の鐘」は、学内を見続け、その精神を伝えようとしている。



手前が「愛知大学設立趣意書(抄)碑」、奥は「亜細亜友好記念碑」、そして中央が「自由・受難の鐘」(豊橋校舎にて。名古屋校舎にも建てられている)